

令和4年度 学校評価表

品川区立台場小学校

校長

中嶋 英雄

台場小学校校区教育協働委員会

委員長

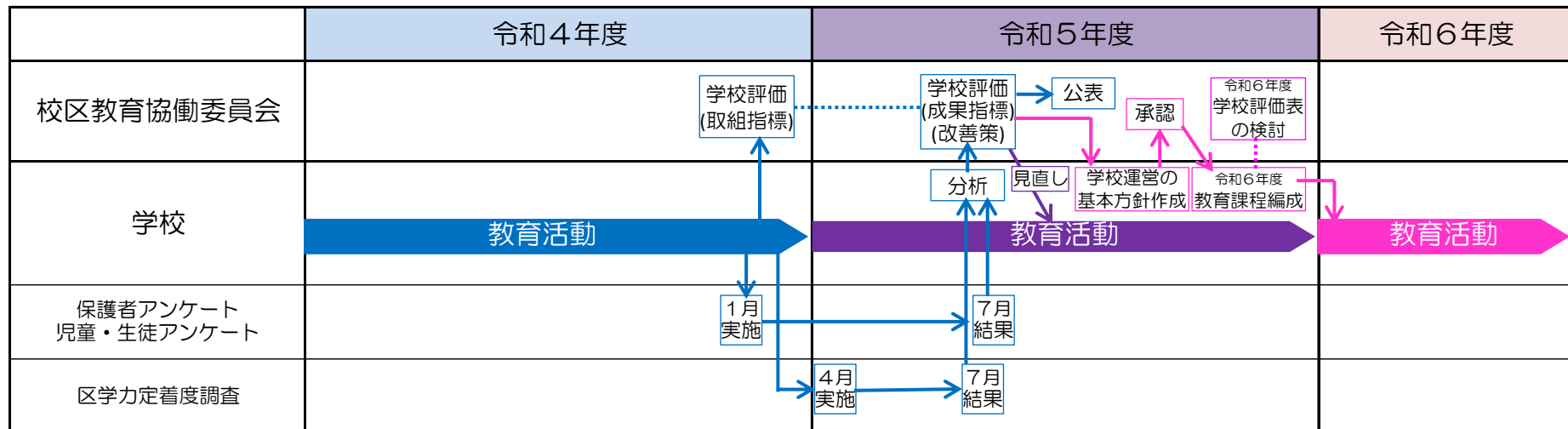
酒井 朗

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和4年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和4年度の学校評価が令和5年度および令和6年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和4年度 学校評価 品川区立台場小学校

評価項目1 学力に関すること

重点目標		○各教科の学習内容で、基礎基本となる知識や技能の定着を図る。 ○自ら学ぼうとする意欲・学習態度を大切にして、主体的で対話的な深い学びの実現を図る。 ○教師の指導力の向上を図る。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	区学力定着度調査では、全学年各教科の目標値を90%以上、上回るようにする。	6学年の理科以外、すべての学年・教科について達成することができた。2学年は全教科が目標値を超えることができた。	B	○日々の学習指導において、全教員が共通理解・共通実践を図っていく。 →各学年の担当教員が分析し、関係する教科の教員が検討した「『品川区学力定着度調査』の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組」(令和5年9月29日以降本校ホームページに掲載)を全教員が正しく理解し、毎時間実施していく。
	少人数・複数指導体制、丁寧な見取りと適正な評価によるきめ細かな指導を進める	単元前にレディネステストを実施することに加え、単元後のコース別の評価も加味し、より児童の実態に即したコース分けを目指す。	B	
	個の課題に応じたドリル的学習(東京ベシックドリル、区学テ補助教材、eライブラリ、MARUGLANDなど)を適宜活用する	活用できる教材について理解を深め、授業の隙間時間や家庭学習等より多くの場面を通して個別学習を進めていく。	B	
	サントレ・視写・暗誦・作文・スピーチなどに朝の帯学習で取組み、言葉の力を高める	教育課程にある通り、全学級、全児童が決められた時間に確実に実施できるよう取り組んでいく。	C	
②	各学年、「好きな教科や授業がある」と回答する児童をクラスの90%以上とする。	2～6学年における10学級中、6学級が達成することができた。	B	○ユニバーサルデザインを意識し、すべての児童が参加できる授業を行う。 →校内研究での学びを生かし、ユニバーサルデザインを意識した授業を行う。 ○聴覚での指示が多い。 →「一指示一行動」「視覚化」を基本に、どの児童にも分かる指示を出していく。
	「学習の準備」「姿勢」「聞き方や発表の仕方」など、台場スタンダードを徹底する	正しい机上の準備で始業時刻に臨み、姿勢の保持、返事や話型など、全学級が意識して指導し、全児童が身に付けられるようにする。	B	
	どの児童にも分かる授業を目指し、明確な指示や発問、板書などの工夫を進める	予定した学習内容が終えられない時間があった。簡潔な指示に留意し、振り返りを次時に生かしていく。	B	
	情報収集、整理分析、まとめ、表現、考えの共有・比較、合意形成などの力を育てる	タブレット端末のロイロノートのシンキングツールを活用することにより、児童の思考の可視化や共有を図っていく。	B	
③	教材研究、研修の充実や通級指導教室などとの連携を図る	指導内容や課題、学級で行える合理的配慮について、通級指導教室担当教員と学級担任間で連携を図ることができた。	B	○校内のICT活用について温度差がある。 →校内研修の実施や実践例をまとめて活用できるようにする。 ○互いの授業を見合う。 →短時間でもできるだけ多く参観する。 ○アセスメントなどを活用していく。 →支援教室や通級教室の教員が、マルグランドやMIMの使い方を伝授したり、その後の取組などについて連携を図ったりしていく。 ○十分な教材研究をするための時間の確保が難しい。 →会議の精選や事務作業の見直しを行う。
	ベテラン教員が教材分析、タブレットの活用の共有やOJT研修を推進する	ベテラン教員による授業力の推進、ICT担当による教具の整備および授業におけるタブレット端末の活用に向けた研修を進めていく。	C	
	アセスメントおよび読み書き障害などに対応したドリルやソフト(東京ベシックドリル、区学テ補助教材、eライブラリ、MARUGLAND)を有効に活用する(特別支援教室・通級指導教員は、MIMトレーニングなどの使用が可能。)	効果的な使用場面など、理解を深め、全教員が活用を進めていく。さらに、特別支援教室および通級の指導教員と通常学級担任が連携し、個別指導の充実を図っていく。	C	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		○家庭、地域、保育園・幼稚園、連携学校などと連携し、規範意識の醸成と基本的な生活習慣の定着を図る ○各教科や市民科、学校行事、保幼小交流活動、日常生活の中で、人権尊重教育を通して、自他共に大切にし、相互に認め合える態度や能力を育て、支持的風土を構築する ○豊かな国際感覚を身に付けて、共生共助社会の実現を目指そうとする態度や能力を育てる		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	学習規律・生活規律を守ることを、全児童の90%が意識して、主体的に学校生活を送る。	主体的に行動したり、自分の行動を客観的に振り返ったりすることができない児童がいる。登校時刻や授業の開始時刻が守れない児童がいる。	B	○チャイム着席ができていない。 →時計を見る習慣づくりや予鈴で動く意識づくりをしていく。 ○丁寧な言葉遣いができず、敬語を使うことができない。 →教員が丁寧な言葉を使い、児童名を呼び捨てにせず、手本を示す。授業中、丁寧な言葉でやりとりを促す。 ○「はい、たつ、です」および「ぐう、べた、びん」が体得できていない。 →意図的に繰り返し指導をする。 ○来訪者に挨拶できていない。 →取り組み続ける。
	時間を守る、あいさつや返事、丁寧な言葉遣い、家庭学習・読書などの定着を図る	特に、「時間を守る」「あいさつ」「丁寧な言葉遣い」においては、教員自らが児童の手本を示していく必要がある。	C	
②	人権に係る知識や態度を身に付け、自己を大切にするとともに、友達などに優しく接する。	おおむねの児童が友達に優しく接することができるが、自己肯定感が低く、自信のない児童が多い。また、人権に係る態度を表出できていない児童もいる。	B	○自分のよさにはまだ気付かない児童がいる。 →自分のよさに更に目を向けさせ、自分も友達も認め合う心を育てる。 ○人権教育は、繰り返し実施する必要がある。 →今年度も人権学習会を実施する。特に高学年では、個別的視点からの人権教育を系統的に実施する。
	人権教育指導計画に基づいて、普遍的、個別的な視点からの取組を充実させる。	教職員の研修、毎月の人権デーなどを、年間計画や月・週目標に位置付け、日々の指導を継続的に取り組んだ。今後、取組の周知や、実践に向け環境を整えていく。	B	
	命に係る取組を年間指導計画に位置付け、命の尊さを考え、命を守る態度を育てる。	来年度の取組については教育課程の通り実施していく。	B	
	縦割り班活動・清掃、保幼小児、障害者との交流を通して、自己有用感を高める。	ペア学年での縦割り班活動や清掃、保育・幼稚園との交流など、異年齢活動だからこそ見られる児童の良さを見ることができた。	A	
③	日本や世界にも目を向け、多様性を尊重し、課題を解決しようとする姿勢を育てる。	多様性を意識することはできたが、尊重させるまでに至らなかった。また、問題解決の力を育てる必要がある。	B	○多様性を尊重できる児童を育成する。 →主に市民科の学習を通して、人権感覚や多様性尊重の意識を育てる。 ○課題を解決する力を身に付けさせる。 →課題を見付けたり、興味のあることを調べたりする機会を設け、解決方法を教え、実際に考えたり実践したりする機会を設ける。(給食委員会で世界の料理について集会で発表する等) ○SDGsに関する教育が不十分である。 →地域との連携の中で、まちづくりや海洋教育の充実を進める。また、事前事後の学習に取り組み、その成果を全校に発信していく。
	地域や日本の伝統文化に触れ、その良さを発信する能力や態度を育てる。	剣道教室、切り子細工体験、落語鑑賞教室、町探検、地域行事への参加を通して地域や日本の伝統文化の良さに触れた。今後、発信する機会を設けていく。	A	
	海洋教育などに取り組み、よりよい世界を実現するためにできることを考える。 【次回から次のように変更する】 「住み続けられるまちづくり」や「海の豊かさを守ろう」に取り組み、安全で、安心して、大切なものが守られる社会を自らつくり出していこうとする意識や能力を身に付けさせる。	持続可能な開発のための教育(ESD)を推進するため、教員が研修したり、児童に持続可能な開発目標(SDGs)に関する本校の取組を示したりする必要がある。	C	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		○体育、健康教育全体計画に沿って、体育科における授業の充実を図る ○運動の習慣化や健康意識の向上を図る ○安全指導計画に沿って、交通事故や災害、不審者対応などの様々な危機を想定しての安全指導や体験的な訓練を行い、命を自ら守ろうとする態度や知識、技能を身に付けさせる ○個に応じたアレルギー対応を適切に行い、未然防止に努める		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	全ての児童が、「わかった」「できた」喜びを味わい、運動の意欲が高まる。	初めから「できない」と思いこんでしまい、意欲が高まらない児童もいる。	B	○一人一人の目標を明確にして授業づくりを行っていく。 →スモールステップで取り組ませ、できたことを視覚的に示し、成功体験を増やし、達成感を味わわせていく。単元を通してのゴールイメージを設定させ、毎時間の学習後、「どれだけ近付けたか」「次の課題は何か」をつかませていく。
	常に自分なりのめあてを意識して取り組めるよう、場の工夫やTAの有効な活用を図る。	児童のめあての設定では、「どのような姿になりたいか」を意識させていく。TAには、模範演技を児童に示していただくなどさらに有効に活用していく。	B	
②	東京都統一体力テストで、8割以上の種目で区の平均を上回る。	区の平均を上回った種目は10.4%という結果であった。長座体前屈および立ち幅とびにおいては、全学年達成することができなかった。	C	○児童が主体的に体を動かす機会が少ない。 →体力向上週間を生かし、苦手種目に特化した時間を設けたり、日常的に運動に触れられるような機会を設置したりする。 →普段の姿勢形成が、体づくりにつながる。座る・書く・食べる等場面に応じた好ましい姿勢を促す。また、全児童に踵まで上履きを履かせる。足裏は床に付けさせる。
	一校一取組、体力向上月間、スポーツライアル、ワンミニッツで、自己・学級目標を設定し、達成感を味わえるようにする。	取組期間中、児童の意欲向上に向け、教員自ら関心を高めていく。さらに、継続して取り組むことにより高い効果を目指していく。	B	
	養護教諭、栄養教諭、医師などと連携を図り、保健学習、食育などの充実を図る。	養護教諭による保健学習、栄養教諭による給食指導を実施した。今後、歯磨き指導を教育計画に位置付けていく。	B	
③	学校や日常生活で、安心して安全に生活することができる。	ルールを正しく理解し、守れない児童もいる。週番の担当教員がいなかったため対応が遅れたことがあった。放課後の遊び方のルールが守られず、危険なことがある。	B	○休み時間のけがやトラブルを防ぐ。 →教員同士の情報共有を綿密にしていく。 ○放課後の遊び方等のルールが徹底されていない。 →学校外で大声を出さずに歩く等、継続的に指導する。学年朝会等で注意喚起を常に行い、保護者の理解協力を仰ぐ。 ○長期休業中の過ごし方を含む学校のきまりが徹底されていない。 →市民科学習を通して、理解し行動できるようにしていく。
	警察署や外部機関と連携し、安全点検、安全教室・避難訓練などの実施、学校や家庭ルールの徹底を図る。	カラーのヒヤリハット地図を用いて全学級で安全指導を行った。安全指導日や避難訓練だけでなく、平日頃から交通安全や命を大切にする指導を意識的に行う必要がある。	B	
	アレルギー研修やチェック体制や危機対応の確立を確実に進める。	職員室前方に「食物アレルギー確認ボード」を設置し、全教職員で該当児童を把握した。献立表作成時におけるアレルギーチェックを複数で行っていく。また、担任が給食室から確実にワゴンを受け取るなど、引き続き全教員で努めていく。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和4年度 学校評価 品川区立台場小学校
 評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		○「いじめ」という人権侵害の防止を徹底し、差異を認め合える人権教育を推進する ○いじめの早期発見や対応、組織的な解決に努める ○保護者、家庭と連携を密にするとともに、地域、教育委員会や関係諸機関とも協同して解決に当たる		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	本校のテーマ「自分も大事 友達も大事 認め合い」が100%の児童に浸透している。	テーマは浸透しているが、正しく意味を理解していなかったり、行動できていなかったりする児童は少なくない。	B	○人権DAYの取組をまず教員が児童に手本を示す。 →人権DAYの意義や目標、取組内容について、教員が理解する。また、人権DAYでの取組の周知を受けて、まずは教員が手本を児童へ示していくようにする。さらに、学級で内容を説明し、行動できるようにしていく。テーマと人権ジャーを掲示するなど、2階の人権コーナーを活用する。 ○呼名の際、「さん」づけの徹底が図られていない。 →授業中など教員が手本となる。
	「人権DAY」(月1回)では、人権感覚を育てる指導や活動を行う。	人権DAYに学級で指導する内容について、前週の夕会や回覧機能を活用して、周知していく必要がある。	B	
②	生活アンケートで「学校が楽しい」かつ「友達と仲良くしている」と答える児童が90%以上いる。	友達と楽しく過ごしている児童が多いが、自分本位の児童も多く、友達への言動を振り返る必要がある児童も多い。	B	○児童理解を深める。 →HYPER-QUやi-Checkなどの調査を活用し、多面的多角的に児童の様子を把握する。 ○自己肯定感を高めさせていく。 →教材研究や研修に努め、「楽しく分かりやすい授業づくり」を実践する。活動に丁寧に取り組ませることにより、達成感や充実感を高めさせる。認め励ますことを通して、成長を意識させる。 ○児童同士の理解を深める。 →児童が互いを理解し、それぞれの良さを認め合えるような声掛けや学習を行う。
	アンケートなどの結果に基づき、面談や聞き取りなどにより早期発見に努める。	アンケートを通して児童の状況を把握し、毎回迅速に児童から聞き取りを行い、早期発見に努めた。全教員で連携、分担して児童に寄り添った。	A	
	状況把握、児童理解に努め、全教職員、保護者と協力し、問題解決に当たる。	副担任も含め多くの目で児童を見守った。学年主任、生活指導主任、養護教諭、管理職に報告し、主幹教諭、特別支援教育コーディネーター、SC等と連携を密にとり、チームで対応した。また、生活指導夕会で詳細に情報共有を行い、迅速に関係機関と連携し、保護者への連絡を密に行っている。	A	
③	いじめの未然防止、早期発見に努め、いじめゼロを目指し、適切に組織的に対応する。	早期発見、早期対応に努め、学年や管理職への報告・連絡・相談を確実に行った。学年夕会や生活指導夕会を通して、各学級の様子を共有し、様々な視点からいじめ防止について取り組んだ。特別支援教室、SC、巡回相談員など、様々な視点からアプローチを検討した。	A	○いじめゼロを目指す一方で、いじめがあるかもしれないという意識の下、早期発見を継続する。 →登校時や休み時間の表情や声の様子も注意深く見守り、複数の教員で共有していく。 ○児童に関する共通理解事項を次年度に円滑に引き継いでいく。 →面談内容も含め記録を残し、確実に引き継ぐ。
	学年会(週1回)や校内支援委員会(月1回以上)を実施し、些細なことでも見逃さない。	今年度から週1回副担任も含めた学年会を設定し、情報共有を行いながら学年経営に当たられた。特別支援教育コーディネーターが連携し校内委員会を運営した。SCから対応について助言を得た。全学年が引継ぎに向け記録に努めた。	A	
	温かな学級風土、児童・保護者との信頼関係づくりに努める。	保護者対応は面談内容を吟味し、複数であたった。今後も継続していく。保護者が来校された際は声をかけ、学校での様子などの情報共有の時間をもった。	B	

評価項目5 コロナウイルス感染症対策に関すること

重点目標		<p>○一人一人の感染予防に関する行動が、自分の命を、家族を、社会を守ることに繋がることを理解できるようにする</p> <p>○手洗いや咳エチケット、換気といった基本的な感染症対策に加え、「3つの密」を避けるために、身体的距離の確保(ソーシャルディスタンス)など、学校内外において徹底できるようにする</p> <p>○正しい知識と情報をもとに行動できるようにする</p>		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	学校生活における感染症予防対策を浸透させる。	感染予防の意識が高く、感染症の流行なく学校生活を送ることができた。	A	<p>○新型コロナウイルス感染症が5類になっても、健康観察や日頃からの対策が大切であることを継続的に伝えていく。</p> <p>→今後も手洗いのタイミングと重要性を指導していく。</p>
	手洗いや消毒などコロナウイルス感染症対策の大切さについて、児童が理解し、実践することができるようにする。	日々の健康観察を怠らず、慢心することのないように指導を続け、児童の意識も高まってきている。東京サラヤ株式会社様のご協力による手洗い教室を通して意識や実践力がさらに高まった。	A	
②	学習場面、生活場面における対策を講じる。	「区立学校版 感染症予防ガイドライン」に基づき、感染症予防の視点を踏まえながら全校で統一して対策を講ずることができた。	A	<p>○差別や偏見に関して引き続き人権教育と関連させながら指導していく必要がある。</p> <p>→場面や児童の実態に応じた指導を行っていく。各学年・学級で正しい知識について指導を重ね、相手をよく知る重要性を理解させる。</p>
	教室におけるソーシャルディスタンスの確保などをしっかりと行う。	窓を開け換気に努めることも含め、実践することができた。	A	
	登校時や休み時間の児童の密を避けるように、時間や場所を考慮するなどの対策を進める。	毎日、校長・養護教諭をはじめ、複数の教員で児童の登校を迎え、配慮することができた。	A	
	新型コロナウイルス感染症に対する差別や偏見をなくす指導を実施する。	引き続き、差別や偏見は許さない指導を通して、児童自ら差別や偏見をしてはいけないという意識をもつことができるようにする。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成